

沙門はいんの CL 閑話 50

—百丈野狐—
—赤髭のだるまさん—

遠藤博因 hakuin@river.ocn.ne.jp

今回もまた禅の逸話から始めたいと思います。

百丈和尚が説法する時、いつも一人の老人が雲水たちと一緒に座って説法を聴き、彼らが退出する時はいつも一緒に退出していた。ある日老人は雲水たちが退出した後も一人で残っていた。

百丈和尚は「わしの目の前にたっているのは誰か」と尋ねた。

老人は「はい、私は人間ではありません。大昔、迦葉仏の時、この寺の住職でした。ある時、一人の僧に“大悟した人は因果に落ちますか、落ちませんか”と問われ、“因果に落ちない”と答えてしまいました。この答えのため私は五百回も野狐に生まれ変わらなければいけません。願わくばどうぞ私のために一転語を授け、野狐の身から解き放ってください」と和尚に懇願し、「大悟した人は因果に落ちますか、落ちませんか」と問うた。

百丈和尚は「因果を味まさない」と言い放ち、これを聞いた老人は直ちに領悟した。

さらに百丈和尚に礼拝して「私は今、野狐の身を脱することができました。その亡骸は裏山にありますが、どうかそれを亡僧の資格で埋葬してください」と言った。

百丈和尚は維那和尚に木拈（木のころを台に打ちつけて合図の音を出す道具）を打たせ、昼食後亡僧の葬儀があることを告げさせた。僧たちは皆元気で病人もないのにどのようなことかと不審に思った。食事の後、百丈和尚は修行僧を引き連れ裏山に登り岩陰から一匹の野狐の亡骸を引き出して、火葬にした。

夕方、百丈和尚は講座に上がってこの出来事の一部始終を語った。すると黄檗和尚は「老人は正しい一点語を下し得なかったので、五百回も野狐に生まれ変わらなければならなかったとのことですが、もし彼がそのたびごとに答えを誤らなければ、彼は何になっていたでしょうか」と問うた。

百丈和尚は「もっと近くに来るがよい。言ってみせよう」と黄檗和尚を招いた。黄檗が進み出て合掌したところで、手を打って大笑いして「胡人の髭は赤いと思っていたら、赤髭の胡人がいた」と大笑いして言った。

実はこの逸話は以前（季刊CL64号2012.4）に紹介させていただいたものです。前回は前半部分だけでしたが、今回は後半部分も含めて紹介させていただきました。少々長くなってしまいましたが我慢して読んでみてください。前半部分の解説に関しては、以前の季刊誌をご参考ください。今回は、後半部分のお話ですが、裏山に野狐の亡骸を見つけだして火葬にしたということについては、禅の修行の見地からはことさら重要でもなく、蛇足のようなものです。大切なのは百丈和尚の受け答えで、「胡人の髭は赤いと思っていたら、赤髭の胡人がいた」というくだりです。胡人というのはインド人のことで、ここではインドから禅を伝えに渡ってきた達磨大師のことを指しています。中国人から見れば、インド人は赤ら顔に見え、髭も赤く見えるのでしょうか。百丈和尚の受け答えは表現の仕方は違いますが、赤い髭をたくわえた胡人と、赤髭の胡人は同じ達磨さんを指していることに違いはありません。百丈和尚の返答の真意は「黄檗よ、やはりお前もちゃんと同じ境地で悟っていたのか、あっぱれ、あっぱれ」と言った感じでしょうか。

CLでも真実の一つと教えています。もちろんそれを表す表現は多様にありますし、見方、感じかたは人それぞれ違います。そのことをしっかり受け入れ、最善の行動をなすことがCLでは重要です。



レイノルズ先生のコメントに、誰もが間違いをしますし、その事実からは逃れられない。重要なことは間違った後、次に何をするかです。間違いは次に何をすればよいかという情報を与えてくれます。間違ったとい



う事実は、後ろに置いて、次になすべきことに着手してくださいとあります。『Gateless Reflections by D.K.R 2』

老人は間違っただけゆえに、野狐の身に落ち五百回生まれ変わったようですが、いつも説法を聴くという前向きな行動を取っていました。その結果、百丈和尚から一転語を授けられ悟りを得ることができました。次に何をするかということは、重要なポイントです。

間違ったときは、すぐ起き上がる、だるまさんを思い浮かべてもらえばよいのではないのでしょうか。

今回も誌面にて皆さんとお会いできるご縁に感謝して

合掌

(富山県南砺市井波 CL インストラクター)

 [目次へ戻る](#)